

## 日本語の節形成に見る形態と機能との対応関係

黒木 邦彦

### 要 旨

筆者は語との統語面での共通性に基づいて、日本語の句/節を次のように分類する：

- (1) a. 名詞相当の句/節＝名詞句/節
- b. 副詞相当の句/節＝副詞句/節
- c. 連体詞相当の句/節＝連体詞句/節

そして、どのような句/節を形成するかに基づいて、句/節形成に関与する形式の統語的機能を次のように分類する：

- (2) a. 文を形成する機能＝<終止>
- b. 名詞句/節を形成する機能＝<準体>
- c. 副詞句/節を形成する機能＝<連用>
- d. 連体詞句/節を形成する機能＝<連体>

かつての日本語は連体詞を欠いており、史的变化の過程で <連体> を獲得したと考えられる。古代日本語において、準体形接尾辞と連体形接尾辞とが同形であったことを踏まると、<連体> は <準体> から派生したのだろう。ところが、現代日本語は連体形接尾辞を持っていながら、準体形接尾辞を失っている。

古代日本語は、中心的語類に準じる節を単位の小さい形式＝語で、周辺の語類に準じる節を単位の大きい形式＝句で作っていた。

一方、現代日本語は、周辺の語類である連体詞に準じる節を単位の小さい形式で、中心的語類である名詞に準じる節を単位の大きい形式で作るのである。しかも、現代日本語の連体形接尾辞は <終止> も兼ねる。このことは、日本語の節形成において、形態と機能との対応関係が希薄化したことを意味する。

### 1 はじめに

ほとんどの現代日本語は、<終止> と <連体> とを兼ねる用言屈折接尾辞を有している（統語面での共通性を重視して、動詞と形容詞とを一括して、用言と呼ぶ）。本稿ではこのような用言屈折接尾辞を“終止・連体形接尾辞”と呼ぶ。

現代標準日本語（以下“標準語”）では、//(-r)-u// <非過去> ないし //(-i)-!ta//<sup>1</sup> <過去>

<sup>1</sup> //(-r)-u, (-i)-!ta// の (-r) (-i) などは、清瀬 (1971) に言う“連結子音”ないし“連結母音”。そして、黒木 (印刷中) に倣い、音便形を生じさせる形式の初頭には“!”を付す (清瀬 1971 も参照)。

で作る終止・連体形用言を次のように多様に用いる:

- (1) a. 文の基幹として:  
 i. [s 家に [v ar-u]].                    ii. [s 柄が [A ooki-i]].  
 b. 連体詞節の基幹として:  
 i. [NP [ADNC 家に [v ar-u]] [N 本]]=を  
 ii. [NP [ADNC 柄が [A ooki-i]] [N 包丁]]=を  
 c. 名詞節を形成する動詞句の基幹として:  
 i. [NC 家に [VP [v ar-u]=no]]=を 持って 来て.  
 ii. [NC 柄が [VP [A ooki-i]=no]]=を 持って 来て.  
 d. 副詞節を形成する動詞句の基幹として:  
 i. [ADVC 家に [VP [v ar-u]=kara]] 持って 来て.  
 ii. [ADVC 柄が [VP [A ooki-i]=kara]] 持ち易い.

そのため、終止・連体形接尾辞の統語的機能は明瞭ではない。その他の用言屈折接尾辞が統語的機能を専一化させているのとは、対照的である:

- (2) 終止形接尾辞  
 a. [s 早く こっちに [v ko-i]].  
 b. [s 晩御飯 一緒に [v tabe-j-oo]].  
 (3) 連用形接尾辞  
 a. [ADVC 手を [v age-te]] 横断歩道を 渡りましょう。  
 b. [ADVC もう 少し [A jasu-kereba]] 買えるのに。

また、(1b, c) のとおり、現代日本語における連体詞節の基幹は用言で、名詞節の基幹は動詞句である。周辺の語類に準じる前者を単位の小さい形式＝語で、中心的語類に準じる後者を単位の大きい形式＝句で作るという点も興味深い。

そこで、本稿では次の問いを解明する:

[問] 日本語の節形成に見る形態と機能との対応関係は、通時的にどう変化したか。

## 2 文の成分

筆者は日本語の文の成分を次の3種類に大別する(文の成分については、三上 1953, 益岡・田窪 [1989] 1992: II, 角田 1991, 影山 1993 などに詳しい):

- (4) a. 述語 (predicate): 文末で補語と付加語とを統べる語。  
 b. 補語 (complement): “内の関係” (寺村 1975–78) で連体修飾できる語 (cf. Keenan & Comrie 1977)。  
 c. 付加語 (adjunct): 上記以外の語。<sup>2</sup>

筆者は、内の関係で連体修飾できるか否かで補語と付加語とを区別する。そして、構造の違いに基づいて、文の成分になる形式を次のように分類する (語, 句, 節の分類については, 三上 1953, 屋名池 1988, 益岡・田窪 [1989] 1992, 宮岡 2002 などに詳しい):

- (5) a. 語 (word): 文の成分の最小単位で, 1 個以上の形態素から成る。  
 b. 句 (phrase): 1 個以上の語と任意個 (0 個を含む。以下同様) の接語 (clitic) とから成る。X 句の統語的特徴は X 詞のそれに準じる。  
 c. 節 (clause): 文の成分の最大単位で, 1 個の述語と任意個の補語, 付加語とから成る。X 節の統語的特徴は X 詞のそれに準じる。

## 2.1 語

語は文の成分の最小単位で, 1 個以上の形態素から成る。筆者は, (4) のうちのどの成分として働くかに基づいて, 日本語の語を表 1 のように分類する:

表 1 日本語の語類

	述語	補語	付加語	統語位置
動詞		*	*	文末
形容詞		*	*	文末
名詞				不定
副詞	(*)	*		不定
接続詞	*	*		文頭

i. \*: 不適格

ii. 動詞と形容詞との違いは形態面にしかない。両者は統語的には等しいので, 本稿では用

<sup>2</sup> 連体修飾語は名詞句の成分であって, 節の成分ではない。また, 益岡・田窪 [1989] (1992) が提案する主題は, 補語ないし付加語のうち, 節頭のものや =wa などを取るものを指すようであるから, 筆者はこれを節の成分の一種とはしない。

言として一括することもある。

- iii. 副詞と接続詞との違いは統語面にしかない。両者の文中での働きは等しいので、副詞として一括してもよいかもしれない。
- iv. 指示副詞 //koo, soo, aa// は例外的に述語としても働く。

- (6) a. [N 明日]<sub>COMP</sub> [N 寿司]<sub>COMP</sub> [V 食べる]<sub>PRED</sub>.
- b. [N 結局]<sub>AD</sub> [ADV そう]<sub>AD</sub> [V 書いた]<sub>PRED</sub>.
- c. [ADV とても]<sub>AD</sub> [N 頭]<sub>COMP</sub> [A 良い]<sub>PRED</sub>.
- d. [CONJ でも]<sub>AD</sub> [N 全部]<sub>COMP/AD</sub> [N 外れ]<sub>PRED</sub>.
- e. [N 確か]<sub>AD</sub> [N これ]<sub>COMP=も</sub> [ADV そう]<sub>PRED</sub>.

(「確か」は影山 1993 に言う “形容名詞”)

- V: 動詞 ●A: 形容詞 ●N: 名詞 ●ADV: 副詞 ●CONJ: 接続詞 ●PRED: 述語
- COMP: 補語 ●AD: 付加語

これらの他、専ら句の成分になる語がいくつかある (cf. §2.2)。

## 2.2 句

句は 1 個以上の語と任意個の接語とから成る。次に挙げる X 句の統語的特徴は、X 詞のそれに準じる:

- (7) 動詞句:
  - a. [VP ... =用言的接尾語]
    - i. それは 全く [VP 知りません=でした].
    - ii. 食べ物も [VP 美味しい=らしい]=よ.
    - iii. お前も [VP 来る=ん=だ].
    - iv. うちの ウサギは [VP 垂れ耳=です].
    - v. 僕も [VP そう=だ]=よ.

- b. [VP ... =統語的助詞] (統語的助詞: 準体助詞, 連用助詞<sup>3</sup>)
- i. [NC 家に [VP あった=の]] = を 持って 来た.
  - ii. [ADVC お前が 余計な ことを [VP 言う=から]] 怒って 帰ったよ.
  - iii. [ADVC あいつが [VP 来る=なら]] 俺は 行かない.
  - iv. [ADVC 本当に [VP 好き=なら]] 辛くても 続けられるはず.
- c. [VP 連用形用言#補助動詞]<sup>4</sup>
- i. 何を 頼んでも [VP 動き=さえ しない].
  - ii. 最近 鼻濁音を [VP 聞かなく なった].
  - iii. 好きに [VP すれば 良い].
  - iv. そろそろ 家に [VP [VP 帰らない=と] いけない].
  - v. 味は [VP [VP そう=で] も ない].

(8) 名詞句: [NP 連体詞#N=準体助詞]<sup>5</sup>

- a. [NP ここ=から]=が 本番です.

<sup>3</sup> 余談であるが、佐賀方言は次のように、用言にも体言にも接尾する連用助詞をいくつか備えている。

- (I) a. [ADVC 昼かい 雨ん [VP 降っ=き]] 出らん. (「降っき」の基底形は //fur-u=gi//)  
 ‘昼から雨が降るなら、出掛けない’  
 b. [ADVC 昼かい [VP 雨=ぎ]] 出らん.  
 ‘昼から雨なら、出掛けない’
- (II) a. [ADVC がい [VP かしこか=けん]] 大丈夫やろう.  
 ‘とても賢いから、大丈夫だろう’  
 b. [ADVC [VP [NP [ADNC がい かしこか] いん]=けん]] 大丈夫やろう.  
 ‘とても賢い犬だから、大丈夫だろう’
- (III) a. [ADVC いつも [VP おらん=ばってん]] 仕事は ちゃんと しよいよ.  
 ‘いつもいないけど、仕事はちゃんとしてるよ’  
 b. [ADVC いつも [VP ああ=ばってん]] 仕事は ちゃんと しよいよ.  
 ‘いつもああだけど、仕事はちゃんとしてるよ’

<sup>4</sup> 次のように、用言と補助動詞との間には完投詞が挿入できるように思う:

- (IV) あの 本 [VP 読んで=は まあ いる=けど] 理解 できては ないかも.

筆者の内省だけでは頼りないので、参考までに、甲南女子大学に通う 1920 歳の学生 52 名 (大半は関西圏出身) に、全国共通語としての (IV) の適格性を「自然」「理解できる」「理解できない」のいずれかで判定してもらった。そして、「自然=2 点」「理解できる=1 点」「理解できない=0 点」で点数化し、合計点を平均すると、1.115 点 (少数第 4 位以下は切り捨て) になった。

以上のことから、補助動詞の自立性は語に準じると見て、接語の境界を示す = は入れない。

<sup>5</sup> 次のように、連体詞と名詞との間には完投詞が挿入できるように思う:

- (V) [NP この えーっと 小説]=は 村上春樹が 書いたもので ...

筆者の内省だけでは頼りないので、参考までに、甲南女子大学に通う 1920 歳の学生 52 名 (大半は関西圏出身) に、全国共通語としての (V) の適格性を「自然」「理解できる」「理解できない」のいずれかで判定してもらった。そして、「自然=2 点」「理解できる=1 点」「理解できない=0 点」で点数化し、合計点を平均すると、1.019 点 (少数第 4 位以下は切り捨て) になった。

以上のことから、連体詞の自立性は語に準じると見て、接語の境界を示す = は入れない。

- b. 明日は [NP この 本]=を 読もう.
- c. [NP いわゆる 冷戦体制下=で]=の 外交政策.

(9) 連体詞句: [ADNP N=no]

- a. [NP [ADNP ウサギ=の] [N 餌]]=を 買いに 行ったみたい.
- b. [NP [A/DNP 英語=の] [N 新聞]]=を 毎日 読んでる.

## 2.3 節

節は文の成分の最大単位で、1 個の述語と任意個の補語、付加語とから成る。次に挙げる X 節の統語的特徴は、X 詞のそれに準じる:

(10) 名詞節: [NC 補語<sup>n</sup> and/or 付加語<sup>n</sup>#準体形述語]

- a. [NC [ADVC 優れて]AD [V 時めきたまふ]PRED] ありけり.  
 ‘群を抜いて、寵愛されてらっしゃる人がいた’ (源氏, 桐壺: [14] 27)
- b. [NC [N 一番]AD [N 活き]=が COMP [VP 良い=の]PRED]=を 頂戴.

(11) 副詞節: [ADVC 補語<sup>n</sup> and/or 付加語<sup>n</sup>#連用形述語]

- a. [ADVC [N 酒]=を COMP [V 飲みながら]PRED] 仕事 してる.
- b. [ADVC [ADV もし]AD [VP そう=なら]PRED] ちゃんと 言って 欲しい.

(12) 連体詞節: [ADNC 補語<sup>n</sup> and/or 付加語<sup>n</sup>#連体形述語]

- a. [NP [ADNC [NP [QC 命 かけて]=と]AD [V 誓った]PRED] [N 日]]=から
- b. [NP [ADNC [ADV とても]AD [VP 利口=な]PRED] [N 子]]=だから 大丈夫.

## 3 句/節形成に関与する形式の統語的機能

用言屈折接尾辞, 準体助詞, 連用助詞などは句/節形成に関与する形式である。筆者は、どのような句/節を形成するかに基づいて、当該形式の統語的機能を次のように分類する:

- (13) a. 文を形成する機能=<終止>
- b. 名詞句/節を形成する機能=<準体>
- c. 副詞句/節を形成する機能=<連用>
- d. 連体詞句/節を形成する機能=<連体><sup>6</sup>

<sup>6</sup> 連体詞は //N=no// や準体形動詞 (現在の連体詞句/節) から派生した語類である (§4)。よって、名詞に =no を接尾させたり、用言を連体形に変えたりして、連体詞句/節を作ると考えるのは、「コウモリという動物はコウモリ傘に似ているからそういう名前が付けられたのだ、という本末テントウ」(三上 1953: 25) ではある。

#### 4 <連体> の獲得

日本語学界では、名詞に先行して、名詞句の成分となる次の語を連体詞と呼んでいる (cf. (8))<sup>7</sup>:

- (14) a. うち [NP[ADN いわゆる] [N 中小企業]]=に 当たる.  
b. [NP[ADN その] [NP 汚い 手]]=を 離せ.

しかし、かつての日本語は連体詞を欠いていたと考えられる。

- (15) a. [N そ]=を 取ると  
其乎取登  
‘「それを取る」と’ (万葉, 1, 50)  
b. 大輔 少納言などは [N こ]=は いかにと 聞こゆ.  
‘大輔, 少納言などは「これはなぜ」と申し上げる’ (源氏, 若紫: [14] 225)
- (16) a. [NP[??[N そ]=の] [N 花妻]]=に  
曾乃波奈豆末尔  
‘その花のような新妻に’ (万葉, 18, 4113)  
b. いさや. [NP[??[N こ]=が] [NP 見苦しき こと]].  
‘さあ。このみっともないこと’ (うつほ, 菊宴: [15] 25)

指示名詞 (15) の存在を踏まえると, (16) は //N=no, N=ga// で構成される句と見るべきである<sup>8</sup>。古代日本語 (本稿では 11 世紀以前の日本語を指す) が連体詞を欠いていると考えるのは, このように分析できることに拠る。

では, //N=no, N=ga// はどのように性格付けられるだろうか。これらを連体詞句とするのは宜しくない。「連体詞は欠いているが, 連体詞句は備えている」ということになり, 記述の一貫性を欠いてしまうからである。

<sup>7</sup> 次のように, 「大きな」「小さな」は補語も付加語も取れる:

- (VI) a. [ADNC 力士=より AD 手=が COMP 大きな PRED] 人.  
b. [ADNC モデル=より AD 顔=が COMP 小さな PRED] 子.

したがって, これらを連体詞ではなく, //形容名詞=na// (形容名詞という用語は影山 1993 に拠る) に準じる動詞句と見るべきである。

<sup>8</sup> 指示名詞 //ko, so, a, ka// の自立性は中古以降著しく下がる。このことを以って, (16b) を連体詞とする研究者もあるかもしれない。いずれにしても, (16) が連体詞句に由来する (そして, かつての日本語が連体詞を欠いていた) のは明白である。

//N=no, N=ga// の性格づけは柴谷 (2010) に詳しい。柴谷は次のような例を以って、これらを名詞相当の“準体言”(筆者の用語では名詞句) とする:

- (17) a. [NP [N こなた]=の]=は 参で来ぬかな.  
 ‘私の (相撲達) は参上しないのか’ (うつほ, 内侍のかみ: [15] 177)
- b. さがなさは [NP [N 誰]=が]=を 倣ひたるにか.  
 ‘意地の悪さは誰のを倣ったんだか’ (落窪, 卷 1: [13] 82)

柴谷は //N=no, N=ga// をいずれも準体言と見なし, (16) の //N=no, N=ga// と (17) のそれとの違いを次の点に求めている:

- (18) (16) の //N=no, N=ga// は連体修飾語として, (17) のそれは補語として働いている。両者は共に準体言であり, 用法面で異なるに過ぎない。

柴谷 (2009; 2010) が指摘するとおり, 先行研究の多くは, 形式/構造と用法/機能とを混同している。(16) の //N=no, N=ga// と (17) のそれとは同形であるから, 用法を異にする同一形式として捉えるのは, 何ら奇抜ではない。

柴谷 (2009; 2010) が提案する準体言は節レベルでも確認できる。次に挙げる古代日本語の節は, 連体修飾語としても述語/補語/付加語としても働くという点で, 名詞句 //N=no, N=ga// に通じる:

- (19) a. [NP [NC <sup>ゑが</sup>垣下に ofasi-tar-u] [N 人々]=に 綾重の 女の 装束 一具づつ ... をなむ 賜ひける.  
 ‘(饗宴の) 相伴人でいらっしゃる人々に綾重の女の装束一具づつ ... を下賜なさった’ (うつほ, 春日詣: [14] 259)
- b. [NC 中納言の ofasi-tar-u]=に さなど 聞ゆれば  
 ‘いらっしゃった中納言に「そう」などと申し上げると’ (浜松, 4: [77] 357)
- (20) a. [VP [NP [NC いと jamugotona-ki] [N 際]=に=は あらぬ=が]  
 ‘とても高貴な身分ではない人の’ (源氏, 桐壺: [14] 27)
- b. [VP [NC いと jamugotona-ki]=に=は あらね=ど]  
 ‘とても高貴な人ではないけど’ (かげろふ, 中: [20] 168)

(19a, 20a) は一般に連体修飾節と呼ばれているが, 専ら連体修飾語として働くわけではない。柴谷は, 名詞節 (19b, 20b) と同形であることを踏まえて, 連体修飾節 (19a, 20a) を連体修飾用法の準体言 (筆者の用語では名詞節) と見なしている。



筆者は以上の観察を踏まえて、次のように考える：

(21) かつての日本語は連体詞を欠いており，史的变化の過程で <連体> を獲得した。

§2.2 で名詞句の構造を (22a) のように定義したが，古代日本語のそれは (22b) のようであったと考えられる：

- (22) a. 現代日本語の名詞句: [NP 連体詞#N=準体助詞] ((8) (p. 5) を再掲)  
b. 古代日本語の名詞句: [NP 名詞#N=準体助詞]

## 5 古代日本語の節形成

### 5.1 古代日本語の用言屈折接尾辞

筆者は統語的機能の違いに基づいて，古代日本語の用言屈折接尾辞を次のように整理する：

(23) 動詞屈折接尾辞

- a. 終止形接尾辞: //(a)-baja// <願望>, //(-a)-namu// <希求>, //(i)-sika// <希求>, //-e ~ -jo// <希求>, //(-u)-Ø// <平叙>  
b. 準体形接尾辞: //(-r)-u// <平叙>  
c. 連用形接尾辞: //(i)-tutu// <並行>, //(i)-Ø// <連結>, //(-a)-de// <連結.否定>, //(-a)-ba// <仮定.順接>, //(-r)-e// <確定> (ただし，中古以降は接尾語 =ba, =do を要する)

(24) 形容詞屈折接尾辞

- a. 終止形接尾辞: //-si ~ -Ø// <平叙>  
b. 準体形接尾辞: //-ki// <平叙>  
c. 連用形接尾辞: //-ku// <連結>, //-kere// <確定.順接> (ただし，中古以降は接尾語 =ba, =do を要する)

### 5.2 統語的機能の専一性

(23, 24) のとおり，古代日本語の用言屈折接尾辞は統語的機能を専一化させている<sup>9</sup>。

---

<sup>9</sup> 次に挙げる動詞 //—zi// からは，<終止> と <準体> とを兼ねる動詞屈折接尾辞 //(a)-zi// が抽出できそうである：

(次頁に続く)



## 6 現代日本語の節形成

### 6.1 現代標準日本語の用言屈折接尾辞

標準語の用言屈折接尾辞は、清瀬 (1971), 屋名池 (1986; 1987), 風間 (1992) に詳しい。今更提案することでもないが、筆者は統語的機能の違いに基づいて、標準語の用言屈折接尾辞を次のように整理する (cf. 清瀬 1971, 屋名池 1986):

#### (26) 動詞屈折接尾辞

- a. 終止形接尾辞: //e ~ -ro// <命令>, //(j)-oo// <意志>
- b. 終止・連体形接尾辞: //(r)-u// <非過去>, //(i)-!ta// <過去>
- c. 準体形接尾辞: //(i)-Ø// <中止><sup>10</sup>, //(i)-!tari// <例示>
- d. 連用形接尾辞: //(i)-tutu// <並行>, //(i)-!te// <連結>, //(a)-zu// <連結.否定>, //(a)-naide// <連結.否定>, //(r)-eba// <仮定.順接>

#### (27) 形容詞屈折接尾辞

- a. 終止形接尾辞: ナシ
- b. 準体形接尾辞: //i// <非過去>, //kaQta// <過去>
- c. 連用形接尾辞: //ku// <連結>, //kute// <連結>, //kereba// <仮定.順接>

§1 で述べたとおり、終止・連体形用言の用法は次のように多様である:

#### (28) a. 文の基幹として:

- i. [S 家に [V ar-u]].
- ii. [S 柄が [A ooki-i]].

#### b. 連体詞節の基幹として:

- i. [NP [ADNC 家に [V ar-u]] [N 本]]=を
- ii. [NP [ADNC 柄が [A ooki-i]] [N 包丁]]=を

#### c. 名詞節を形成する動詞句の基幹として:

- i. [NC 家に [VP [V ar-u]=no]]=を 持って 来て.
- ii. [NC 柄が [VP [A ooki-i]=no]]=を 持って 来て.

#### d. 副詞節を形成する動詞句の基幹として:

- i. [ADVc 家に [VP [V ar-u]=kara]] 持って 来て.
- ii. [ADVc 柄が [VP [A ooki-i]=kara]] 持ち易い. ((1) を再掲)

<sup>10</sup> 次の分析に基づいて、これを準体形接尾辞とする:

- (X) a. 腹が 減ってるだろうに [VP [NC 口を cuke-Ø]=さえ しない].
- b. [NC 本を jom-i-Ø]=に AD 図書館に COMP 行った PRED.

そのため、終止・連体形接尾辞の統語的機能は明瞭ではない。古代日本語の用言屈折接尾辞が統語的機能を専一化させているのとは、対照的である：

## 6.2 非準体形接尾辞

筆者が知る限り、富山県五箇山地方、佐賀市、熊本市の方言では、<準体> 以外の全てを兼ねる動詞屈折接尾辞を使っている（黒木 印刷中）。次のように、いずれも音形が似ており、<義務> を表すという点で共通する（(30–32) は五箇山方言の例）：

(29) <義務> を表す非準体形接尾辞

●五箇山: //(-a)-<sup>N</sup>nan// ●佐賀: //(-a)-Nba// ●熊本: //(-a)-nan//

(30) a. [CC imaa mero=mo hatarak-a-<sup>N</sup>nan].

now.TOP woman=even work-V-ADN.OBLG

‘Even women must work nowadays’

‘今は女も働かないといけない’

b. [CC asita=mo ko-<sup>N</sup>nan].

tomorrow=even come-ADN.DECL

‘(I) must be gonna come tomorrow’

‘明日も来ないといけない’

(31) a. [ADNC aNnja=ni iw-a-<sup>N</sup>nan] koto=ga ar-u.

2.S=L:D:E say-V-ADN.OBLG matter=G.I:N be.INANM-ADN.DECL

‘(I) tell you what’

‘あんたに言わないといけないことがある’

b. [ADNC kjoo si/e-<sup>N</sup>nan] sigotaa na-i=ka=no=i?

today do-ADN.OBLG work.TOP not\_be.INANM-ADN.DECL=Q=RMND=POL

‘Don’t (you) have today’s work?’

‘今日しないとといけない仕事はないかね?’

(32) a. [ADNC hajo se-<sup>N</sup>nan] owar-a-N=cja.

quick.ADV.MED do-ADV.OBLG finish-V-NEG.ADN.DECL=RMND.CALL

‘If (you) won’t do (it) quickly, (you) won’t finish it’

‘早くしないと、終わらないよ’

b. [ADNC hikooki=ni nor-a-<sup>N</sup>nan] ik-e-N=zo.

airplane=L:D:E ride-V-ADV.OBLG go-POSS-NEG.ADN.DECL=RMND

‘If (you) won’t ride an airplane, (you) won’t go (there)’

‘飛行機に乗らないと、行けないぞ’

これらの方言では、節形成における形態と機能との対応関係が標準語以上に希薄化している。

## 7 結論

かつての日本語は連体詞を欠いており、史的变化の過程で <連体> を獲得したと考えられる。古代日本語において、準体形接尾辞と連体形接尾辞とが同形であったことを踏まると、<連体> は <準体> から派生したのだろう。ところが、現代日本語は連体形接尾辞を持っていないが、準体形接尾辞を失っている。

古代日本語は、中心的語類に準じる節を単位の小さい形式＝語で、周辺の語類に準じる節を単位の大きい形式＝句で作っていた。

一方、現代日本語は、周辺の語類である連体詞に準じる節を単位の小さい形式で、中心的語類である名詞に準じる節を単位の大きい形式で作るのである。しかも、現代日本語の連体形接尾辞は <終止> も兼ねる。このことは、日本語の節形成において、形態と機能との対応関係が希薄化したことを意味する。

### 略号

●V: 動詞 ●A: 形容詞 ●N: 名詞 ●ADV: 副詞 ●CONJ: 接続詞 ●PRED: 述語 ●COMP: 補語  
●AD: 付加語

●1: first person ●2: second person ●ACC: accusative ●ACOND: anti-conditional ●ADLT: adult  
●ADN: adnominal ●ADV: adverbial ●ASPR: absolute superior ●ALL: allative  
●ANM: animate ●BEAU: beautifier ●CAUS: causative ●CCL: conclusive ●CCSV: concessive  
●CNT: continuous ●COND: conditional ●DECL: declarative ●DSAT: dissatisfactory ●HS: hearsay  
●INANM: inanimate ●IFRR: inferior ●ILL: illustrative ●IMP: imperative ●INTR: intransitive  
●IRR: irrealis ●L:D:E: locative; dative; essive ●LOC: locative ●MED: medial  
●NEG: negative ●NMNL: nominal function ●NMLZ: nominalizer ●G:I:N: genitive + inferior; nominative  
●G:N: genitive; nominative ●OBLG: obligative ●PL: plural ●POL: polite  
●POSS: possessive ●PST: past ●Q: question ●RAT: rational ●RMND: reminder ●SSP: suspensory  
●SIML: simultaneous ●TOP: topic ●VBLZ: verbalizer

### テキスト

『万葉集』(8C 後) — 『補訂版 万葉集 本文篇』, 塙書房, 1998 年, 佐竹昭廣・木下正俊・小島憲之 (校訂), 底本: 西本願寺本

- 『うつほ物語』(10C 後) —— 『新編日本古典文学全集 14-16 うつほ物語』, 小学館, 1999-2002 年, 中野幸一 (校注), 底本: 尊経閣文庫蔵前田家各筆本
- 『かげろふ日記』(10C 後) —— 『日本古典文学大系 20 土佐日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』, 岩波書店, 1957 年, 川口久雄 (校注), 底本: 宮内庁書陵部蔵本 (旧桂宮蔵本)
- 『源氏物語』(11C 初) —— 『日本古典文学大系 14-18 源氏物語』, 小学館, 1958-63 年, 山岸徳平 (校注), 底本: 三条西家本
- 『源氏物語』(11C 初) —— 『新編日本古典文学全集 20-25 源氏物語』, 小学館, 1994-98 年, 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 (校注), 底本: 伝明融筆臨模本・大島本・伝定家筆本
- 『浜松中納言物語』(11C 後) —— 『日本古典文学大系 77 篁物語 平中物語 浜松中納言物語』, 岩波書店, 1964 年, 遠藤嘉基・松尾聰 (校注), 底本: 国立国会図書館蔵本
- 『大鏡』(11C 末) —— 『日本古典文学大系 21 大鏡』, 岩波書店, 1960 年, 松村博司 (校注), 底本: 東松本

## 参考文献

- 小田 勝 (2006) 『古代日本語構文の研究』, おうふう
- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房
- 風間 伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」, 宮岡伯人 (編) 『北の言語: 類型と歴史』, pp. 241-60, 三省堂
- 清瀬 義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と —— 日本語動詞無活用論 ——」, 『国語学』86, pp. 42-56, 国語学会
- 黒木 邦彦 (印刷中) Verbal morphology of Gokayama dialect. 『甲南女子大学研究紀要』48 (文学・文化編), 甲南女子大学
- 柴谷 方良 (2009) 「日本語準体法再考 —— 体言化と連体修飾 ——」, 『日本語文法学会 第 10 回大会発表予稿集 (於学習院女子学院大学)』, pp. 33-43, 日本語文法学会
- (2010) 「理論的研究と方言研究をつなぐ —— 準体助詞の機能と展開 ——」, 研究発表資料 (於京都大学, 2010 年 5 月 21 日), 未公刊
- 角田 太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版
- 寺村 秀夫 (1975-78) 「連体修飾のシンタクスと意味 (その 1-4)」 [再録: 『寺村秀夫論文集 日本語文法編』, くろしお出版, 1992 年]
- (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版
- 益岡 隆志・田窪 行則 [1989] (1992) 『基礎日本語文法 —— 改訂版 ——』, くろしお出版
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説 —— シンタクスの試み ——』, 刀江書院 [復刻版: くろしお出版, 1972 年]
- 宮岡 伯人 (2002) 『語とは何か エスキモー語から日本語をみる』, 三省堂
- 屋名池 誠 (1986) 「述部構造 —— 現代東京方言述部の形態=構文論的記述 ——」, 『松村明教授古稀記念 国語研究論集』, pp. 583-601, 明治書院
- (1987) 「活用 —— 現代東京方言述部の形態=構文論的記述 [2] ——」, 『学苑』565, pp. 194-208 (左開き), 昭和女子大学
- (1988) 「語 —— 現代東京方言述部の形態=構文論的記述 [4] ——」, 『学苑』577, pp. 199-209 (左開き), 昭和女子大学
- Keenan, E. L. and B. Comrie. (1977). Noun phrase accessibility hierarchy and universal grammar. *Linguistic Inquiry*. 8. pp. 63-99. Massachusetts: MIT Press.